エリザベス二世(1926-2022)**の国葬報道の補足情報**

10 月 11 日　　37 回　竹本　修文

はじめに

2022 年 9 月 9 日筆者は NHK のラジオ深夜便を聞いていて、午前 3 時の時報に続くニュースで訃報を聞いた。昨年、夫君のフィリップ殿下に先立たれて以来公式行事をチャールズ皇太子が代行する事が多くなり、危惧していたので、「とうとうきた」との気持ちだった。その後の国葬の様子は沢山のメデイアが伝えているので、イギリス事情に不案内な方々の為に参考になればと思い、補足的な情報を投稿する。

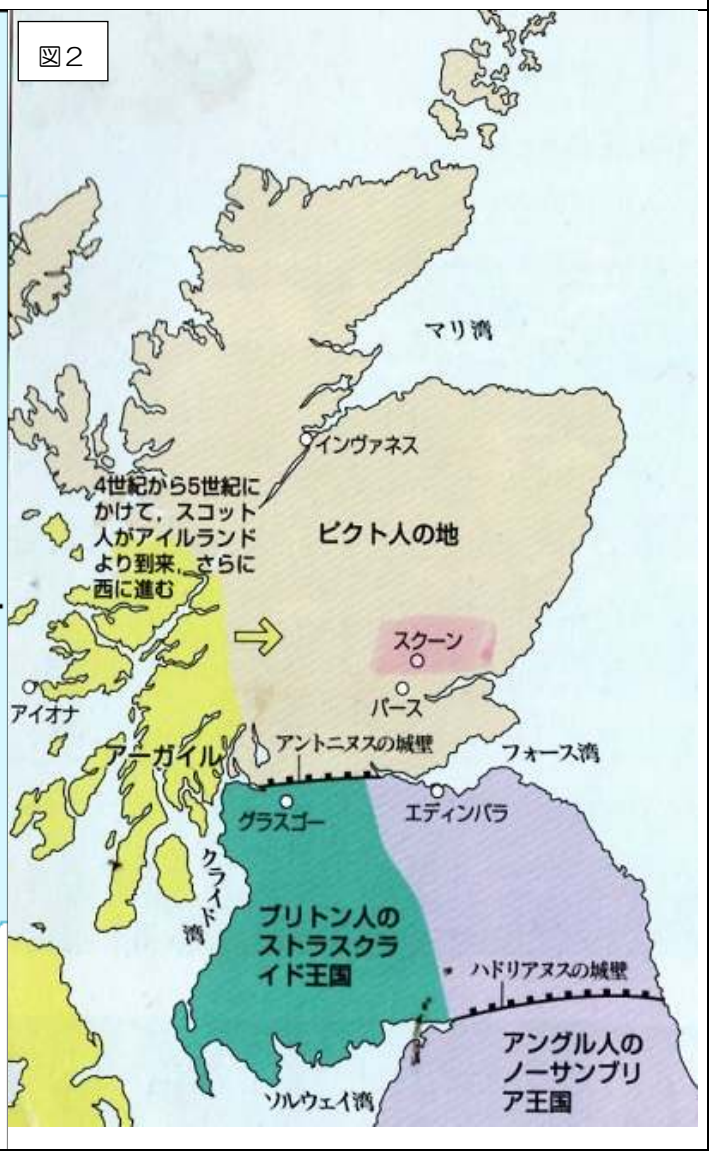
第 1 章．イギリス王国の概要

1.1 王国の中の国々： イギリスという国は**図 1** の右側の大きな島**ブリテン島**と、左側の**アイルランド島**に跨っている。**アイルランド**は約 400 年間イギリスの植民地だったが、約 100 年前に北アイルランドを除き独立した。ロンドンは北緯 52.5 度で日本近辺では樺太の中央に相当し、エリザベス女王が亡くなった**スコットランド**は、カムチャッカ半島に相当する。女王が好んだ夏の宮殿・バルモラル城は気温が低いからである。**図 2** はローマ帝国の北端だったイギリスからローマ人が撤退した時期から、北のスカンジナビアから侵入してきたノース人がスコットランドの地に定住した 8 世紀までの地図である。

六か国対抗ラグビー"Six Nations Rugby"ではイングランド、スコットランド、ウエールズ、アイルランドはそれぞれ "nation"とされており、政府もそれぞれを「国の中の国　"countries within a country"」と表現しており、フランスとイタリアを加えて六か国である。**ウエールズ**は 13 世紀にイングランドに征服されており、国旗やスタンダードにはウエールズの紋章は描かれていない。アイルランドが独立した時に北アイルランドはイギリスに残って国が分割されたが、アイルランド・ラグビー協会は分裂せずに残っている。将来は、北アイルランドもイギリスから離脱してアイルランド共和国に併合される噂がある。

図１

図２



1.2　王室について若干の補足：

イングランドのチューダー朝のエリザベス女王は独身で後継者がなく 1603 年の没した。イングランドは血縁を遡って調べて、スチュアート家のスコットランド王ジェイムズ 6 世にイングランド王を兼ねて貰う事にし、イングランド王ジェイムズ 1 世として両国は同君連合となった。スコットランド国王ジェイムズは議会と枢密院をエデインバラに残してロンドンに下ったので、エデインバラは宮廷主を失った。イングランドの**スチュアート朝**の始まりである。ジェイムズは**王権神授説**を唱えて議会を軽んじ、息子のチャールズ一世も議会を無視して**マグナ・カルタ**以来の国民の権利をないがしろにして、オリバー・クロムウエル率いる議会派と対立して敗北し、1649 年に処刑された。革命でギロチンにかけられた仏王ルイ 16 世より約 150 年ほど前だった。

イングランド王家から見れば、二人目のエリザベス女王だから、Queen Elizabeth of United Kingdom と、領土が広がっても、エリザベス女王のままでは具合が悪いので二人目は二世になり、Queen Elizabeth of England はエリザベス一世とした。しかし、スコットランドは一世、二世と呼ぶのは間違いである、と言っている。来年には再びスコットランドで国民投票が行われ、イギリスから離脱すると想像する。 図 3 は、エリザベス二世時代の**ウインザー王家**の系図である。

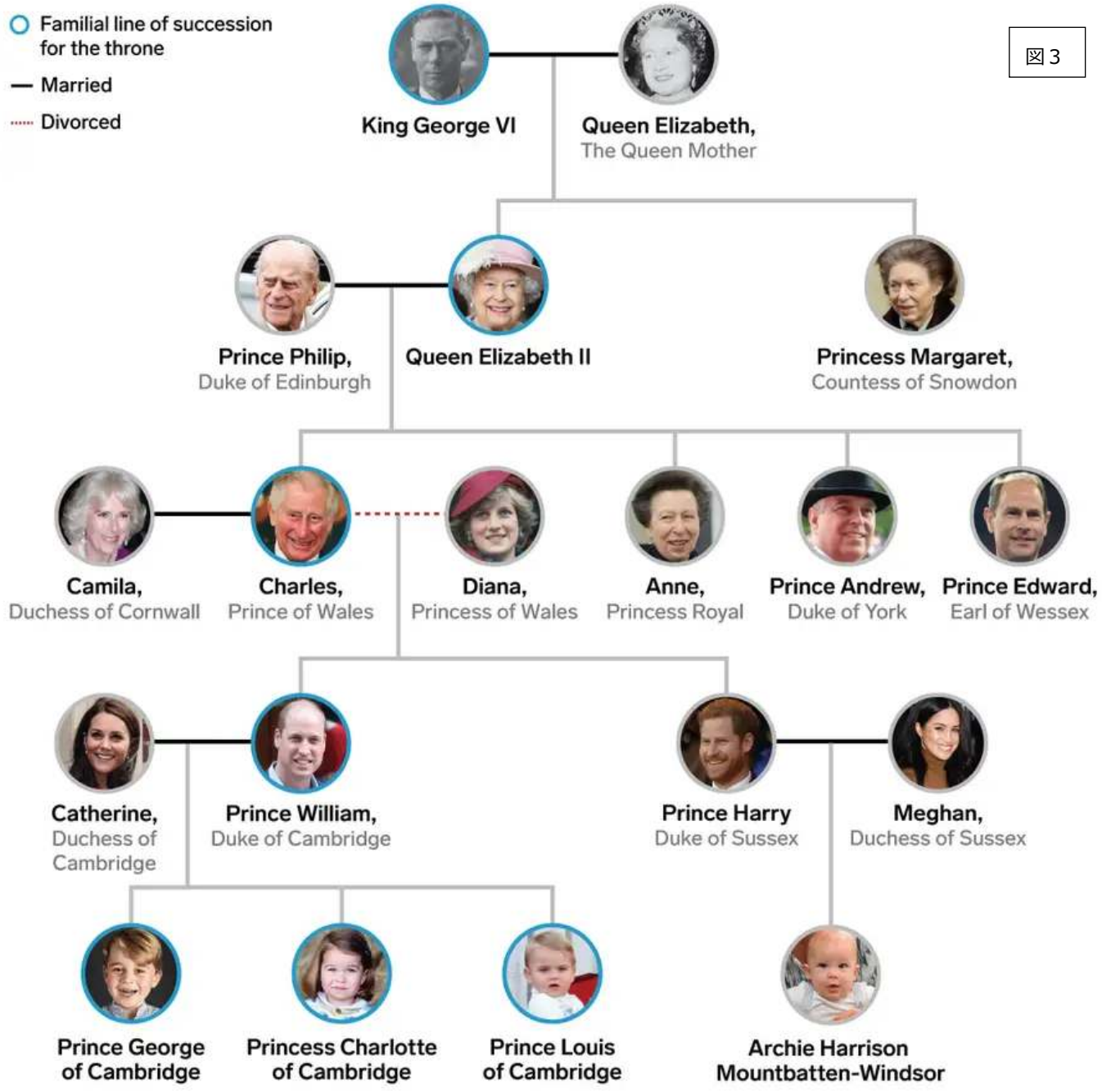


図 3

1.3 エリザベス 2 世後の王室

① 君主 Sovereign: チャールズ国王 King Charles Ⅲ、 王妃カミラ

② 長男ウイリアム王子は国王チャールズ三世からプリンス・オブ・ウエールズ Prince of Wales（王位の法定推定相続人たる王子たる称号）が授与された。
右の写真は、1958 年にチャールズ王子 10 歳の時に、ウエールズのカーナーヴォン城で女王エリザベスⅡ世からプリンス・オブ・ウエールズの称号を授与される場面。

③ 13 世紀にイングランド王エドワード一世はウエールズ王を殺害して征服し、自分の息子をプリンス・オブ・ウエールズに即位させて以来継承されてきたが、現在のウエールズ人は概ね賛成はしているが、カーナーヴォン城での授与式には賛成は４０％程度と伝えられている。

1.4 Royal Standard 王旗

国旗の他にイギリス君主及び王族がスタンダードを持っている。図４は君主のもので、君主が滞在する宮殿に掲揚される。エリザベス女王が崩御したバルモラル城にも掲揚されていて、崩御の翌日には半旗になった。図５は、スコットランド王国のスタンダードで君主は 1707 年にイングランドに併合されてから王はイングランド王と同じだが、スタンダードは別々にある。
女王の棺がスコットランドを移動する時は、お棺はスコットランドの王旗で覆われていた。3 匹の動物が描かれた部分は、12 世紀のイングランド王・リチャード 1 世獅子心王の時に採用された”Leopards” of England であるが、leopard は直訳すれば豹だが、当時は豹もライオンも混同していた。この部分はイングランドを表わし、立った Red Lion はスコットランドを、ハープはアイルランドを表している。王族はそれぞれの紋章バナーを持っており、図６はアン王女のスタンダードの例。

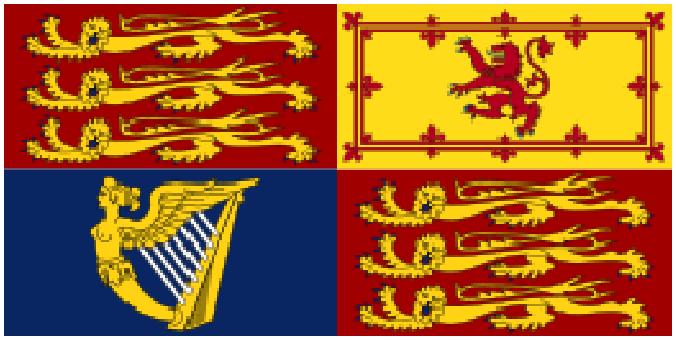


図４、イギリスとイギリス連邦のスタンダード

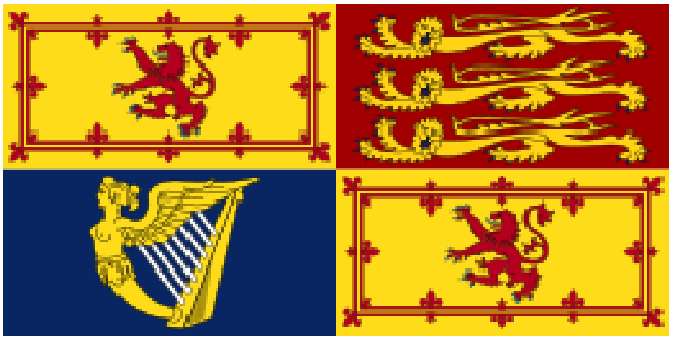


図５、スコットランドのスタンダード

図６は、アン・王女(Anne 、Princess Royal)の紋章バナーで、王族の一例である。

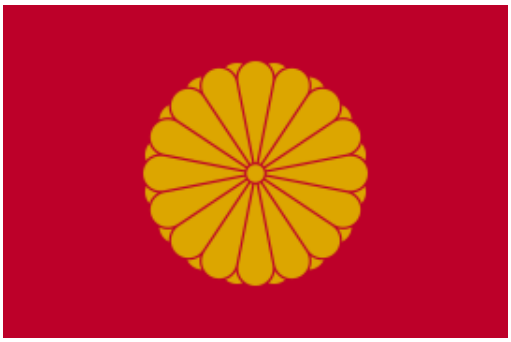


図７は、日本の天皇旗で明治時代に定められていて、新憲法下で法的根拠を喪ったが、使われてる。

第２章.　スコットランド

第１日　９月８日

アン王女は女王と共にあり、チャールズは 10:30 に到着していた。18 時 30 分（日本時間 9 日午前 2 時 30 分））、イギリス王室の公式ツイッターは、「**女王は本日の午後、バルモラルで安らかに崩御あそばされました**」と伝えた。

バルモラル城では王旗(Royal Standard)が半旗に降ろされ、ホリールード城には訃報が張り出され、スコットランドの(Royal Banner)王旗が半旗になった。バルモラル城にいたチャールズ皇太子が国王に、妻カミラが王妃と宣言された図 8 は、ホリルー城に張り出された訃報。図 9 はバルモラル城。

図８

図９

図

図 11

図 10 は、今上天皇が皇太子時代にオックスフォード大学に留学され、1984 年にバルモラル城で女王を訪問し、翌日は女王の夫君エデインバラ公が北スコットランドを車で案内した時の写真、図 11 はその時に泊まったカロデイン・ムアー・ホテルで、筆者は 11 年後にインターネットで予約して泊まったら、二人目の日本人として歓迎され、皇太子が泊まった部屋に一泊した。

第２日　９月９日

国王チャールズ三世と王妃カミラがバルモラル城からロンドンのバッキンガム宮殿に移動して王旗（Royal Standard）を掲げた、国王がいる宮殿以外の宮殿の旗は全て半旗である。

この日、長男ウイリアム王子は国王チャールズ三世からプリンス・オブ・ウエールズ Prince of Wales（王位の法定推定相続人たる王子たる称号）が授与された。

ロンドンのセントポール大聖堂（1981 年にダイアナとチャールズが結婚した教会）では 18 時から政治家と 2000 人の国民による追悼が行われ、国歌 God Save the Queen の Queen を King に変えて初めて歌われた。

第３日　９月１０日　　チャールズ王位継承会議@セント・ジャームス宮殿

① ロンドンのバッキンガム宮殿前の **The Mall** ザ・マルに隣接するセント・ジェームス宮殿にて王位継承評議会が開催され、国王チャールズⅢ世の即位が正式に布告された。この王位継承により、イギリス国歌が「女王陛下万歳（God Save the Queen）」から「国王陛下万歳（**God Save the King**）」に変更された。また、イギリスの紙幣・硬貨に印刷されている女王エリザベス２世の肖像も、新国王のチャールズ３世に差し替えられることになる。

② エリザベス女王の棺はバルモラル城から、エディンバラの**セント・ジャイルズ大聖堂**に移動した後、ホリールード宮殿に移動するため、エディンバラの主要な道路は閉鎖された。イベントはエディンバラ市議会が、スコットランド政府とスコットランド警察と協力して計画した。リズ・トラス首相など、高い地位にある議員は、特別議会でチャールズ３世に対し忠誠宣言した。イギリス王室は、エリザベス２世の国葬が 2022 年９月 19 日になることを発表し、イギリス政府は国葬当日を Bank Holiday 国民の休日に指定した。　（イギリスには国民の祝日は無く、国民の休日として Bank Holiday が５日ある）

③ 補足：スコットランドのキリスト教は長老派教会でセント・ジャイルズ大聖堂は長老派教会の母教会である。幕末に横浜に来たアメリカ人医師のヘボン氏はヘボン式ローマ字を作り、和英辞書を編集し、明治学院大学を創設したが、彼も長老派教会の宣教師だった。イングランドは国教会 Anglican（日本では聖公会）で双方ともプロテスタントではあるが、宗派が異なり対立も大きい。女優のヘップバーンもヘボンも祖先はスコットランド系で、名前の綴りは、Hepburn　である。

第４日　９月 11 日　　（スコットランド内の移動）

スコットランドの**王室旗**（図５）に覆われ、女王の棺が、葬列と共にバルモラル城を出発した。葬列は女王に個人的な関係のあった場所や建物を巡り６時間以上かかった。
葬列が通る道には人々が訪れ、心から**拍手**を送った。葬列は、同日 16 時 23 分に、ホリールード宮殿に到着した。
国王は、王妃と共に高等弁務官とバッキンガム宮殿で会った後、同じくバッキンガム宮殿でイギリス連邦事務局長と出会った。議員たちは女王への賛辞を送り続け。

図 12

図 13

西のエディンバラ城と、東のホリールード・ハウス宮殿を結ぶ大通りが　**ロイヤル・マイル**

制作：竹本　修文

図 14　エディンバラ城

図 15　ホリルード・ハウス宮殿

図 16　中央通り、ロイヤル・マイルの葬列

図 17　　セント・ジャイルズ大聖堂

9 月 12 日

① 国王と王妃はウエストミンスター・ホールで、庶民院と貴族院から弔意を受けた後、両院の議員が新国王に忠誠を誓った。

② 国王と王妃は、女王の棺が安置されているエディンバラまで飛行機で移動しホリールード・ハウス宮殿に到着した。国王はロイヤル・スコットランド連隊による栄誉礼を受け、国王がスコットランドを統治することを示す「鍵の式典の意味の」The **Ceremony of the Keys** が行われた。

③ その後、棺はスコットランドの王室旗に覆われて、国王、アン王女らが棺と共に、ロイヤル・マイルを歩いた。葬列の進行中、エディンバラ城からは 1 分ごとに礼砲が発砲され、セント・ジャイルズ大聖堂の前で完全に止まるまで続いた。

④ 葬列の参列者、女王の友達、政治家やスコットランドの女王の慈善団体は、大聖堂で行われた感謝祭に参列し、女王の人生を祝福し、彼女のスコットランドとの関係を強調した。女王の棺は、大聖堂で 24 時間安置され、一般市民からの弔問も受け付け、30,000 人余りの人が棺を見に訪れた。

⑤ 夜には、国王と王室メンバーが、女王を追悼する**通夜**の式典に参加した。国王をはじめとする女王の 4 人の子供が棺の横に立ち、女王の棺をしばし守った。この儀式はこれまで、男性王族しか参加することができなかったが、**アン王女**は女性として初めて、この役を担った。

図 18　ホリールード宮殿から出発する霊柩車

図 19　ロイヤル・マイルに集まった人々

図 20，**ジャギュアー**（日本ではジャガーJaguar XE ）をベースに女王も設計に参画して製作された霊柩車

ロイヤル・マイルで霊柩車を見送る人々

第 3 章　イングランド

3.1　ロンドン

① イギリスでは、歴史的に大聖堂（Cathedral）がある町は市（City）であり、現在の行政上のロンドン（Greater London）には、セントポール大聖堂があるシテイー（City of London）とウエストミンスター大聖堂があるウエストミンスター市（City of Westminster）がある。しかし、プロテスタンの英国国教と異なるローマ・カトリックであり、City of Westminster は名前には市が付いているが、ただの行政上の特別区である。ウエストミンスター寺院は王家のお寺である。

② 行政上のロンドン Greater London は、シテイー（City）と 32 の特別区で構成されており、イギリス以外にルーツを持つ移民が 50%以上で、市長はイスラム教徒のパキスタン人である。図 21 は、女王の国葬に関係するごく一部の中心部分である。なお、国葬等が行われる図 21 の左下部分の詳細を図 23 に示す。

テムズ川は左が上流なので、地図の川の上部が左岸である。

図 22　崩御された 9 月 8 日のバッキンガム宮殿正面広場

3.2 ロンドンでの葬儀の補足　時系列説明

9 月 13 日

① 首相、スコットランド議会議長と大臣たちは、セント・ジャイルズ大聖堂での最後の礼拝に出席。
女王の棺は霊柩車で、道中たくさんの人が並ぶ中、エディンバラ空港に移された。棺は空軍の担ぎ手たちが棺を航空機に乗せ、ロイヤル・スコットランド連隊は栄誉礼で敬意を表した。アン王女と夫のティモシー・ローレンスと共にロンドンのヒースロー空港の北方 10 ㎞の **RAF Northolt** 空軍基地に移された。

② 国王と王妃は**北アイルランド**を訪問し、首都ベルファストで女王の北アイルランドとの関係の展示を見た。ヒルズボロ城での接見の後、国王と王妃は北アイルランドの信仰指導者と面会し、聖アン大聖堂を訪問した。
アーマー大主教が、女王のアイルランドに平和をもたらすための努力に敬意を表した。シンフェイン党はチャールズ三世の王位継承に関するイベントには参加しないとの声明を出していたが、同党の代表は大聖堂に出席していた。その後、ロンドンに向けて出発した。

③ ロンドンでは、棺は女王が設計にかかわった**特注の霊柩車**（図 20）で、**バッキンガム宮殿**へ移送された。霊柩車が宮殿へ向かう途中の道には、大勢の市民が並んだ。棺は女王の子息と孫の前で宮殿のボウ・ルームに安置された。

④ 葬儀の中心となった地域
図 23 は、バッキンガム宮殿、から棺が通過した、ザ・マル、セント・ジェイムズ宮殿、ホースガーズ・パレード、ホワイト・ホール、ウエストミンスター・ホール、ウエストミンスター寺院、周辺の詳細地図である。
元のウエストミンスター宮殿は、1834 年にウエストミンスター・ホールなど僅かを残して全焼し、その他の建物は再建され、1840 年完成し、国会議事堂として使用されている。NHK の放送でも**ウエストミンスター宮殿、国会議事堂**、**ウエストミンスター・ホール**の説明が混乱していたが、正しくは「ホールも国会議事堂もウエストミンスター宮殿の一部です。

図 23 は、図 21 の中の、バッキンガム宮殿からウエストミンスター地域で、葬儀の中心となる地域の地図

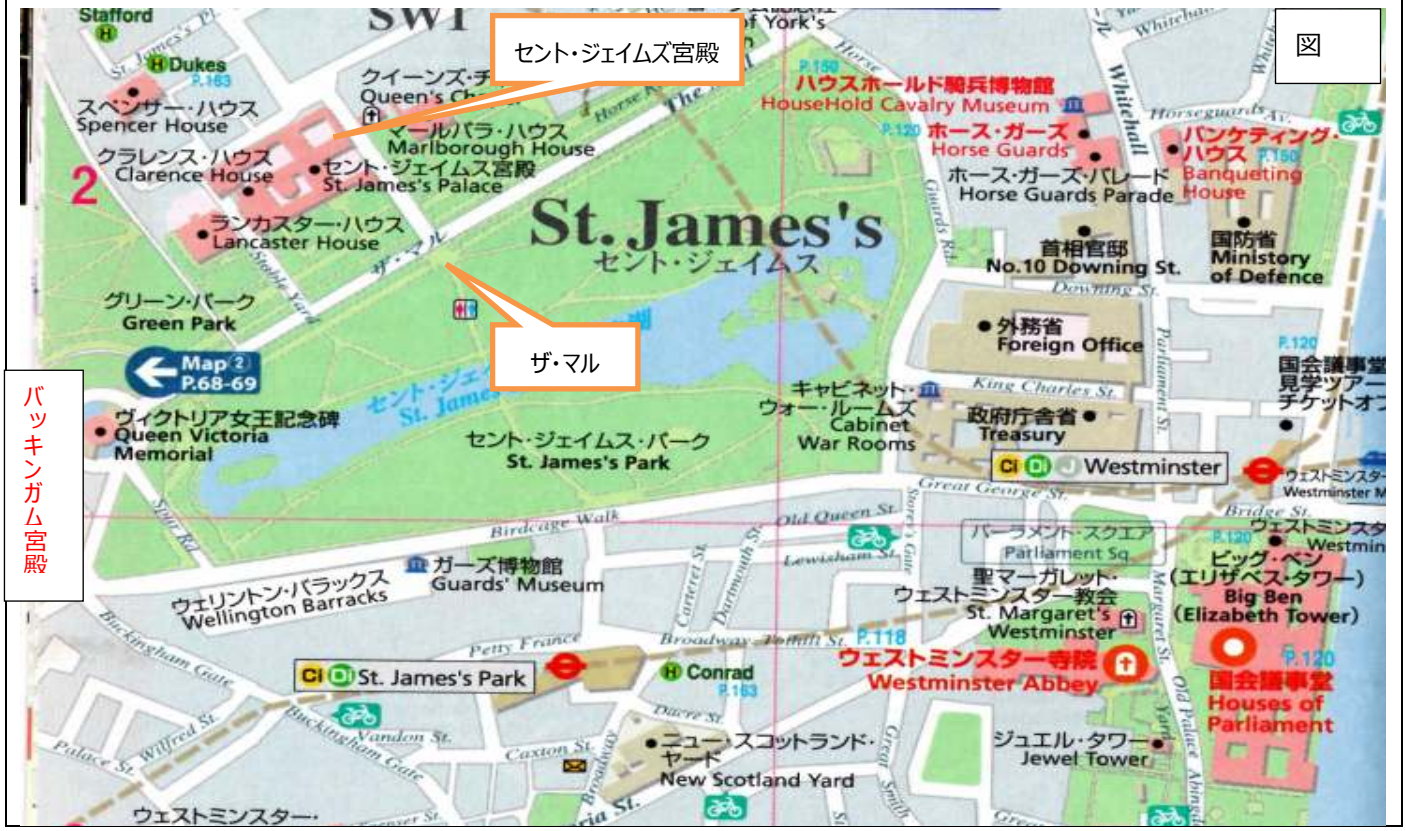
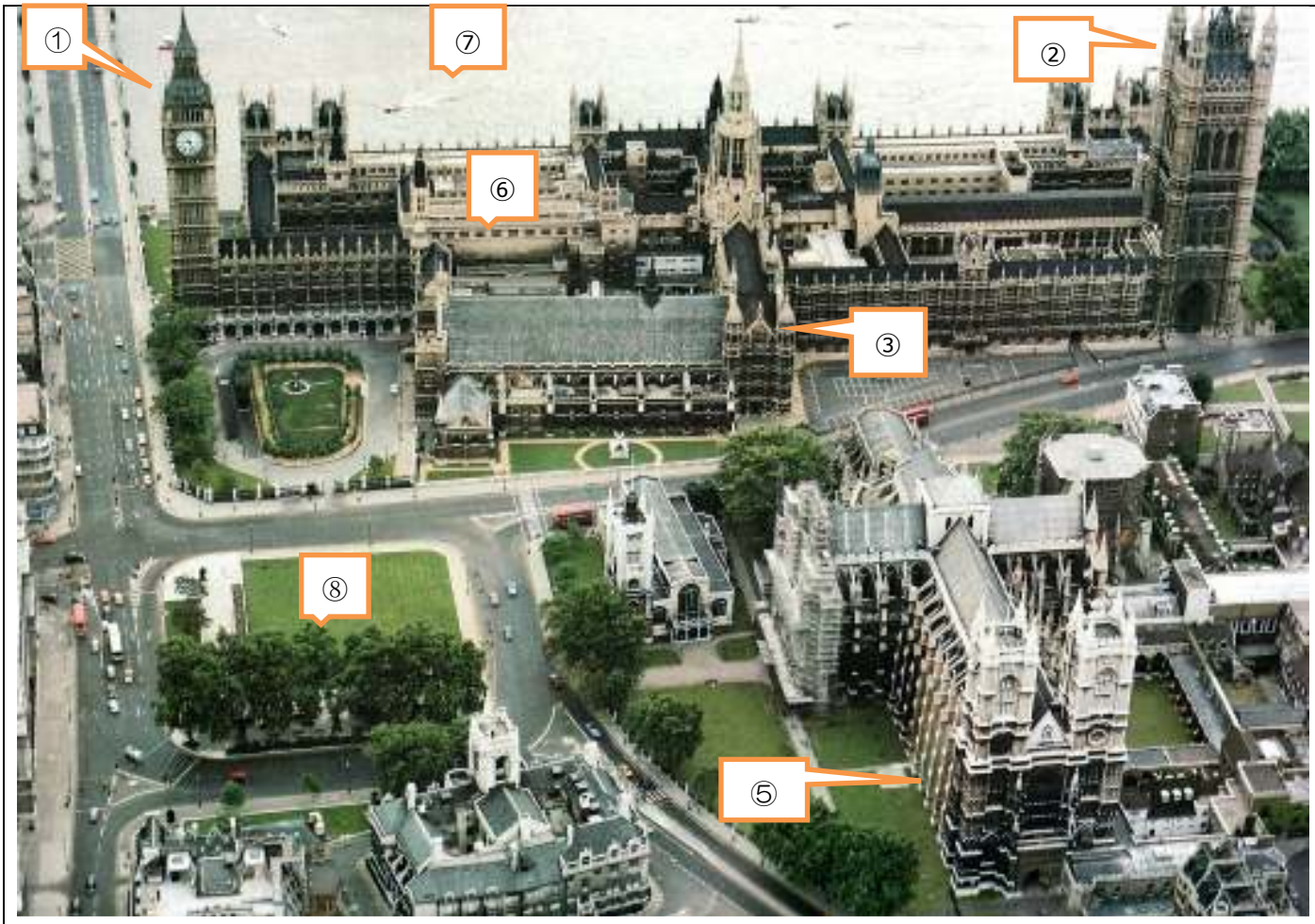


図 24　ウエストミンスター地区中心部の空撮写真



①　エリザベス・タワー（内部の時計が Big Ben），② ヴィクトリア・タワー 、 ③ ウエストミンスター・ホール

⑤　ウエストミンスター寺院　⑥ 国会議事堂　⑦ テムズ川　⑧ パーラメント・スクエア

制作：竹本　修文

2022 年 9 月 14 日　バッキンガム宮殿からウエストミンスター・ホールへ棺の移動

図 25

図 26

女王の棺は、王立騎馬砲兵の砲車に乗せられ、14 時 22 分きっかりにバッキンガム宮殿から国王などの王族の葬列と共にウェストミンスターホールに向けて出発した。
移動中、ビッグベンの鐘は毎分鳴らされ、王立騎馬砲兵はハイド・パークから毎分銃を発射した。
パーラメント・スクエアで棺を受け取るため、陸海空軍の兵隊は栄誉礼を行い、棺の到着後棺台に置いた。カンタベリー大主教とウェストミンスター首席司祭は,国王たち王族の前で奉仕を行い、棺は 17 時からウェストミンスターホールに安置され、国葬が行われる 19 日朝 6 時半まで弔問できる。

2022 年 9 月 15 日　Lying-in-state（埋葬前の）遺体の一般公開

英文化相は「14 日 17 時～19 日 6 時半までの弔問客は、推計として約 25 万人であった。」と英メデイアに語った。

一般弔問の様子、四人の女王の警護兵がサーベルを抜き、床に軽く刺して、両手で押さえている。

2022 年 9 月 16 日

国王と王妃は、ウェールズを訪問した。カーディフ城到着に伴い礼砲が撃たれた。城内には大勢の人がおり、君主制廃止派の 100 人余りの人が無言の沈黙を行った。国王と王妃はまず、ランダフ大聖堂での礼拝に臨み、ウェールズ語での祈りも行われた。　礼拝後、彼らは近くのランダフグリーンで公衆と会った。
国王と王妃はウェールズ議会を訪れ、議会は追悼の意を示し、国王は英語とウェールズ語の両方で演説をした。
ウェストミンスターホールでは、週の前半にエディンバラで行ったのと同様に、女王の子供達が棺の周りで通夜を行った。
彼らは軍服を着て、棺台の四隅を 10 分ほど守った。アンドリュー王子は女王の崩御以来軍服を着てこなかったが、今回だけ例外となった。2020 年に公務を引退したハリー王子は、国王の要請で軍服を着用した。

女王と血の繋がりのある blood family によるお通夜

一般弔問が続く、ロンドンのウエストミンスター・ホールでは、16 日夕方には、女王の子、チャールズ国王とアンドリュー王子、ハリー王子、アン王女がお棺の四隅に立ち、vigil お通夜（約 10 分間）を行った。

翌 17 日夕方は、女王の 8 人の孫が同様にお通夜（約 15 分間）を行った。、

2022 年 9 月 17 日

国王は、第一海軍卿、空軍参謀総長、参謀本部総長、統合参謀副総長、戦略軍司令官と面会し、その後ランベスを訪れ、女王の国葬の一部を準備していた救急隊員と面会した。国王とウェールズ公は、その後安置されている女王の棺を見るために並んでいる人々と話し、 ウェセックス伯爵と夫人はバッキンガム宮殿外の人々と会った。イギリス連邦各国の総督は、国王、王妃、ウェールズ公と公妃、ウェセックス公と公妃、アン王女とティモシー・ローレンス、グロスター公と夫人、ケント公、そしてアレクサンドラ王女によって主催された歓迎会とランチに出席した。また、国王はカナダ、オーストラリア、バハマ、ジャマイカとニュージーランドの首相と面会した。

2022 年 9 月 18 日

午後 8 時、イギリス中で黙祷が行われる。国王は翌 19 日に行われる国葬の前に、各国からの弔意に対して以下の声明を発表した。この 10 日間、妻（カミラ王妃）と私は、国内外から寄せられた多くの弔辞や支援に深く心を打たれました。
ロンドン、エディンバラ、ヒルズボロ、カーディフにおいて、わざわざお越しいただき、私の親愛なる母・エリザベス女王の生涯にわたる奉仕に敬意を表してくださった皆様に、私たちは計り知れない感動を覚えました。私たち全員が最後のお別れをする準備をしていますが、この場をお借りして、この悲しみのさなかに私と家族を支え、慰めてくださった数え切れないほどの方々に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

2022 年 9 月 19 日　国葬

10:44　ウエストミンスター宮殿からウエストミンスター寺院へ棺の移動
エドワード 7 世からの伝統に伴い、女王を載せた砲車は 142 人の海軍兵士によって引っ張られ、国王と王室メンバーは後ろを歩く。公務をしていない王族は、軍服を着用しない。10 時 52 分にウエストミンスター寺院に到着、11 時に葬儀が始まった。
国葬が始まる前のウエストミンスター寺院では、寺院の鐘楼の鐘の中で一番低い音の鐘 The Tenor Bell を 1 分間に 1 回のペースで、年齢に合わせて 96 回鳴らした。
ウエストミンスター寺院の内部の写真は WEB で見られるが、全て無断使用が禁じられているので掲載できなかった。

葬儀に続いて、棺はウインザー城に運ばれ、セント・ジョージ礼拝堂の女王の夫君の棺と並んで埋葬された。
棺の上層階の床には、平らな石の墓標版（Ledger Stone）が置かれている。

ウインザー城前の長さ４kmのロング・ウオークにも一般弔問客が並んだ。棺が通ると拍手で感謝する。

<9 月 21 日の朝日新聞から引用>

「19 日午前に営まれた国葬の後、砲車に載せられた棺は徒歩での葬列に伴わて、バッキンガム宮殿近くへ、その後、霊柩車でロンドン西郊のウインザー城へと移動した。ウインザー城では、女王が最後に飼っていたコーギー犬の「ミック」と「サンデイー」も棺を出迎えた。
ウインザー城内の聖ジョージ礼拝堂での埋葬式には、王族や政治家ら約 800 人が参列。式典では「女王の治世の終りを象徴する儀式があった。王権を示す王笏、宝珠、王冠が棺から次々に下され、礼拝堂の祭壇に置かれた。チャールズ国王が深紅の小さな旗を棺にかけ、侍従長が細く白い杖を半分に折って棺の上に置き、自らの役目を終えたことを示した。
約 10 日間にわたる服喪期間を終え、各地で半旗となっていた英国旗は元に戻された。

以上

制作：竹本　修文